

高校生になると、毎日が急に忙しくなり、気がつくとも一学期はもう終わろうとしていた。常に今日、その時その時のことしか考えていなかった私に、ある日一通の封筒が届いた。

私のホストファミリーの家族構成は以下の通りだ。父・Jeremy、母・Lisa、長女・Sophie(18)、次女・Hannah(15)、そしてケアン・テリアのLouiseの五人家族だった。

まず初めに目に飛び込んできたのは、One dogという言葉で、嬉しさと驚きのあまり、思わず叫んでしまった。昔から犬はとても好きで、家で飼いたいくらいなのだ。趣味の欄には一番始めにBadringtonと書いてあり、私の興奮はさらに増した。そこからは、知らない単語や、正しく読めない単語もあったが、無我夢中で読んでいった。

正直に言って、少し不安な所もあった。私は、子供は好きな方であったが、同い年の子と年上のお姉さんとなると、訳が違う。同い年とは言っても、相手は海外の女の子で彼女の方がぐっと大人びているに違いない。向こうの人からは、私は小学生くらいに見えるのだろうか。ただでさえ私は英語でまともな会話ができないのに。考えれば考えるほどネガティブな思考に陥る自分が嫌になってきた。

でも、出発が近づくにつれ、こんなにあれこれと不安を抱いていたのが、まるで嘘のように楽しみて仕方がなかった。また、初めて海外に、家族と長期間離れて行くということに対し、あまり抵抗もなかった。

そして、必要な物の買い出しや、ホストファミリーへのお土産を選ぶ時も、私の興奮が冷めることはなかった。どんな物が喜ばれるだろうか、日本のお茶は苦手ではないだろうか、とにかく想像するだけで楽しかった。

八月二日、いよいよ日本を発つ日がやってきた。二週間という期間も長いのか短いのか、いまいちわからない。出発の日になっても実感がわかず、時の過ぎゆくままに私は、イギリスに向かう飛行機に乗っている。丸い窓の外には左翼と白

い雲と明るい光がある。見ているうちにとっても不思議な気分になってきた。この現実には、まだ自分の気持ちを追いつけていない。そして私は、心に強く決めた。今後の私の人生で、他人の家にホームステイさせてもらおうという、この素晴らしいチャンスは最初で最後かもしれない。ただただ時間が過ぎて終わっていたというのではなく、少しでも積極的に行動しよう。

一方で、親に高額なホームステイ料金を払ってもらったのにもかかわらず、出発の前にお礼を言いそびれた自分が情けなく思えた。届いているはずもないが、心の中では本当に感謝していた。

十二時間三十分のフライトを終え、イギリスに到着した。入国審査では、目的や期間を聞かれると教えられていたが、実際には聞かれずに終わってしまった。その後、バスでホテルに向かった。初日は友達と過ごすということで、少し気が楽だった。周りはほとんど日本語でイギリスにいるという感覚はあまりなかった。

二日目はロンドンを観光した。昨日までとは違い、英語で書かれた看板や、日本では見たことのない洋風の建物、街行く人々を見ていくにつれ、やっとイギリスにいたことを実感した。まず、周りで英語が飛び交っていることに驚いた。

日本の中心である、沢山の高層ビルが立ち並ぶ東京とはまた違い、ロンドンにはバッキンガム宮殿、ウエストミンスター寺院、ビッグベン等の古くからある建物があり、午前中はそれらを見学した。道路を走るバスやタクシー、電話ボックス、何から何まで初めて見るものばかりで、楽しくて仕方がなかった。

午後になると、大英博物館を見学した。しかしこの時の私は、すでにホストファミリーとの対面式のことまで頭がいっぱいだった。友達とお揃いのリップを買ったりするうちに、ホームステイ先のチェルトナムへバスで移動となった。

開会式のスピーチの時が近づいた。私は生徒代表で挨拶をした。初めの方は順調だった。しかし、途中で時が止まったかのように急に頭が真っ白になった。そこからほとんど紙を読んでしまった。ちゃんと覚えていたはずなのに。とても悔しかった。

気持ちを切り替えて、いよいよそれぞれファミリーとの対面だ。名前が呼ばれ、前に降りていき、挨拶をして写真を撮り、家へ帰っていく。周りの人の人数が減っていき、自分達の番が近づく。会ったらまず何を言おうか、いろいろと考

えた。

そして私の名前が呼ばれた。会った瞬間、温かい笑顔で接してくれて、すぐにこれまでの緊張がほぐれていった。挨拶と名前を述べた後に言われたことは、よく覚えていてる。

「さっきのあなたのスピーチは素晴らしかったわ。」

と褒めてくれたのだ。予想だにしていなかったので、うまく返事ができなかったが、とても嬉しかった。

家に着くと Hannah と Sophie が迎えてくれた。Hannah が家の中を案内してくれた。とても広い家で一階のリビングにはL字型の大きなソファとテレビがあった。二階には私たち用の部屋が二つあったので、個室だった。私の部屋は昔 Sophie が使っていた部屋で、かわいいベッド、ドレッサーや大きな鏡があって、自分が小さい頃に憧れていたような、プリンセスにでもなった気分だった。そこは私の想像をはるかに超えるような部屋で、興奮していたのだが、同時に、この気持ちを言葉でうまく言えず後悔している自分もいた。

もともと、私は感情を外に表現するのが得意なタイプではない。ふとイギリスに行く前に言われた母からの言葉を思い出した。

相手は言葉に表さないと伝わらないことがある、自分で言う必要があるかどうか決めつけたりしないでと。無口になることが、一番相手がどうしたらいいかわからなくて対応に困るから。

初日の夕食はピザだった。今までの習慣で「いただきます」と言おうとしたが、英語にはないようだった。Lisa は食べ始めていて、

「食べていいよ。」

と言ってくれたが、無言で食べ始めることになぜか、自分でもよくわからない違和感があった。だから無言で手だけ合わせてお辞儀をした。すると、それを見た Lisa が微笑んで、手を合わせてお辞儀を返してくれた。ピザの他にサラダも用意してくれた。私はイギリスの家庭では、生野菜を食べない家庭が多いということを知っていたので、まさか初日の夕食から出ると思っていなく、嬉しかった。この日の夕食は遅かったので、Hannah と Sophie はすでに食べ終わっていて、Lisa と Jeremy と四人で食べた。何を話していいかわからず、なかなか自分から話題を切り出すことができなかった。すると Lisa がいろいろと気を使って、私達に、好きな食べ物、嫌いな食べ物、趣味、ペットは飼っているかどうかなどの

質問をしてくれた。私はヨーグルトが食わず嫌いでは食べられないので、ヨーグルトが嫌いだと言った。

Lisa がたくさん話しかけてくれたり、彼女自身の話をたくさんしてくれたりおかげで沈黙にはならなかったが、私は聞かれたことに対して答えるのが精一杯で、会話についていけない部分もあった。その度にさっきあ言えれば良かったとか、こういう答え方もあったとか、一人心の中で後悔してばかりだった。言いたいことは頭に浮かんでいるけど、それが英語として言葉にできないことが、痛感させられた。

夕食を食べ終わると、Jeremy がヨーグルトを持ってきて、

「どの味がいい？」

と聞いてきた。私はさっき苦手と言ったばかりだったが、それはLisa にしか言っていないかった。食べられるかどうか、心の中で本当に焦った。ここでもう一度、はっきりと断るべきか。いや、でもアレルギーというわけではないし本当に食べられないわけでもない。結局、私は食べることにした。

食べてみると意外と平気だった。いや、平気というよりも普通に美味しかった。苦手なものが一つ克服できて良かった。

リビングでは Hannah と Sophie がテレビでサッカーを観ていた。 Hannah は学校でフットボールをやっているらしい。私はルールを全然知らなくて、まずどっちがイギリスのチームなのかすらわからなかった。自分でもおかしな質問だとはわかっていたが、思い切って聞いてみると、丁寧に教えてくれた。テレビに出ている解説者の英語は早すぎて、半分以上よくわからなかったけど、スポーツとして同じ共通ルールだということには変わりなく、ゴールが入りそうな時、点を取った時に一緒に盛り上がったのはとても楽しかった。

翌日から学校だった。平日は毎日、朝から夕方まで学校で過ごしていたので、ファミリーと過ごせる時間というのは思ったより短く、物足りないくらいだった。学校までは Lisa が毎日車で送ってくれた。初めは、車の中ではほとんど話せなかったが、気がつくとだんだん話せるようになってきた。

学校に着くと、朝礼が始まるまでみんなでお互いのホストファミリーのことを喋り合った。もちろん日本語の方が話しやすいし、友達と話すのはやはり楽しかった。

しかし、なんで自分は留学したのか、どうして今ここにいるのか。

二週目になってやっと、そのことを考えるようになり、私はできるだけ日本人

とだけ話すという機会を減らし、クラスにいたイギリス人の学生や先生に、積極的に話しかけた。一分一秒でも長く、英語と触れ合う時間を作ろうと思って、毎日行動していた。

また、授業を受けて、自分には積極性が全然足りないということと、日本のことを知らないということがすごくよくわかった。言いたいことがあっても、あまり発言できなかった。それは、英語で話せないとかいう以前の問題だ。イギリス人の学生は自分の意見をきちんと持っていて、すごいと思った。クラスには、十四歳の日本人とイギリス人のハーフの子がいて、彼女は積極的に質問も発言もしていて、クラスの雰囲気盛り上げてくれた。そこで改めて、国や年齢の違いではなく、自分に足りていない所だと実感した。

授業でイギリスの、法律の年齢基準を習った時、日本の場合のことも聞かれたが、あまりよく知らなかったので、深い会話をするのができずに終わってしまった。悔しかった。英語が話せることもすごく大切だと感じたが、知識を深めることも今後していかなければならないと思った。

家に帰るとファミリーが

「学校はどうだった？」

とか、

「今日は何か買ったの？」

など、毎日気にかけてくれて嬉しかった。ある日、私が人形を買ったと言った時に、人形のdollという単語がdollと聞こえたらしく、とても笑われた。日本では、発音より文法の方が重点的に学んできたが、発音の大切さはよくわかった。

ここに来るまで正直不安はあった。主に英語が通じるか心配していたが、割と片言でも理解してくれていて、困るようなことはなかった。ファミリーのみんなは私が、英語がでなくても、優しくゆっくり理解しようとしてくれて、英語に関する自信が無くなることなく、むしろ自信を持って英語と向き合うことができた。また、自分の伝えたいことが伝わって、会話ができた時は本当に感動した。初めは、英語で言えないことは諦めて他の言い回しにしたり、電子辞書で調べたりしていたけれど、二週目からは、英語で何というかということから聞いたりするようになった。細かいことでも会話をして、コミュニケーションをとるようになった。

友達もできて、ファミリーにいろんな所へ連れて行ってもらって、英語でコミ

ユニケーションがとれて、率直に、ここでの生活はとても楽しかった。それに、自分が何をしなければいけないのかわかったので、自分でいうのも何だが、成長できたとも感じている。たった二週間だったけど、本当に良い経験になった。なによりファミリーが、家族の一員として接してくれたことが嬉しかった。Sophieと Hannahと一緒に遊んだり、お皿の準備、片付けなどの家事の手伝いをしながら、イギリスの家庭の雰囲気味わうことができた。たくさんのことを得られてすごく満足している。東京に着くなり、すぐにチェルトナムに戻りたいと思うくらい、本当に行って良かったと心底思っている。

チェルトナムに行つて、チェルトナムの文化に触れて、イギリスの友達からたくさんの刺激を受け、自分と向き合うことのできた二週間は、私にとってかけがえのないものとなった。

また、向こうでは、買い物の際にコンビニやスーパーのレジの店員さんと、「Hi」とにつこり目を合わせて挨拶する習慣があることを知った。品物を渡して何も喋らなくても済んでしまう日本式に慣れていたから、気がつくまでも時間がかかり、実際にそうすることにも戸惑ったが、次第に店員さんとちよつとした会話することが楽しくなってきた。やはり現地に行くと、日本では想像もできないような、本当にたくさんの発見があるし、自分自身がそれに包まれているので、様々な違いや考え方をものすごいスピードと量で感じていた。それはたぶん実際に行つてみることなしでは、知ることができなかったものと思つている。

今までは英語が話せるようになりたいと思つていたが、英語を使って何がしたいのかについて考えられるようになった。でも、自分の英語はまだ未熟でもっとうまく話せたらさらに良いコミュニケーションがとれたのかなと思う。

行く前は、学校での英語の授業を受けたくらいで、ほとんどネイティブの人と話したことがなく、本当に私の英語で意思が通じるかどうかともわからなかった。もちろん、テレビを見ても何を言っているのか、なぜみんな笑っているのか、内容はほとんどわからないといったストレスもあった。けれど、家ではずっと英語の生活になっていくということもあって、慣れてくると、日本語に訳さずに英語のままを考え始めていたこともあったし、またなにより、英語を話そうとする時の心持ちは変わってきたと実感した。

英語が少し上手になっていくかなと勝手に思い始めたのは、日本に帰ってから Sophie と Hannah に返信メールを書いていたときだった。文章を作るスピードが以前より早くなった気がして嬉しかった。

留学をすることは、素敵な選択の一つだ。私は今、将来の進路のことについて考え、悩んでいる。イギリスに行つて、自分の中で海外の大学に行くという選択

肢も増えた。そして、大学は日本でもまたいつか留学してみたいと思った。今の自分の知識なんてとても小さいものだけど、視野も少し広げることができた。

この二週間は、英語の勉強だけでなく、普段の学校では学べないような、普通に家族旅行で行っていたら経験しないような体験をし、大切なことをいくつも得ることができた。友達もそのうちの一つだ。ここで出会った友達、特に Sophie と Hannah は生涯友達だろうなと感じる。私はこの人達に会うためにイギリスに行ったのかなと思うくらい、このファミリートの出会いは素晴らしいと思った。行くことを決意したことは、本当に間違っていなかったなと思う。チェルトナムで過ごした二週間は私にとって宝物だ。

最後になったが、この素晴らしい環境を与えてくれた、両親とホストファミリート、幸せな気持ちにさせ、私を成長させてくれた、ここで出会った全ての方から感謝したい。